

# 闇鍋大会

鍋は楽しい。鍋はおいしい。だが、それだけでいいのか。  
——普通の鍋では物足りない。刺激が欲しい。  
そんな勇気ある4人の挑戦者たちが、闇鍋に挑む！  
(黒みつ)



## ルール説明

- 一、互いに持ち寄った食材を明かしてはならない
- 二、調理開始とともにアイマスクを装着する
- 三、一人ずつ、はじめに箸にふれた食材を食べる
- 四、一巡後にアイマスクを外し、全て食べきる

## ? 鍋奉行

※鍋奉行は、調理・参加者のサポートを行うとともに、全体を取り仕切る。

## 第三ラウンド ～対面～

いよいよ鍋との対面だ。一体自分たちはどんな鍋を食べていたのか。いや、食べてしまっていたのか。ついに、全員が一斉にアイマスクを外す時が来た!!

さあ、カオスとしか言いようがない鍋の中身を紹介しよう。



鍋の中はこうなっていた!!  
キウイ 餃子 カブリコ 高野豆腐  
コロッケ 鯛焼き 大福 ナン  
バナナ プリン メロン わかさぎ  
※一部沈没して見えない食材があります。あしからず。

「うわ……視覚情報が加わると余計えぐいな……」  
「ちょっとおおおお！ 俺たちこんなの食べてたのお!?!」  
「この溶けてるの……プリン!?!」

## 第一ラウンド ～開幕～

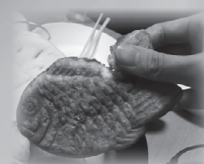
さあ、いよいよ闇鍋大会の始まりだ。和気あいあいとしていた挑戦者たちの顔もこわばりはじめる。

調理が始まると、あたりに緊張感が漂うと同時に、なぜか甘い香りも漂ってきた。



「え、なんか甘いにおいしない?」  
「確かに……」  
「誰だ! 甘いもんもってきたの!」

一気に慌てふためき出す一同。しかしこの中にいる誰かが犯人なのだ。疑心暗鬼に陥る挑戦者たち。



皆が焦る一方、鍋奉行は不敵な笑みを浮かべながら着々と調理を進めていく。  
今、鍋に投入されているのは鯛焼きだ。

続いて数種のフルーツを投入。この時点でかなり危険な状況だが、食材はまだあるのだ。  
挑戦者たちに危機が迫る——!!

## 第二ラウンド ～実食～

ついに鍋を食べる段階へ。先ほどから漂う甘いにおいが怖すぎるが……さてどうなる!?

「くえっ、ちょっとなにこれ! フルーツっぽい。繊維を感じる……わかったメロンだ! 後味きゅうりだもん!」

大当たり。食べたのはメロンだ。だがなぜ後味がきゅうりだとメロンなのか。



「ぶにゃぶにゃ……でもサクサクしてる。桜えびか?」

「ん……? あれ? 普通に食えるわ。がんもかなあ? うん、がんもだわ」

二人とも残念ながら外れである。食べたものはわかさぎとコロッケ。鍋の中で一体何が起きているのか。



「えっ、重い。炭水化物のかたまり! 小麦粉っぽいなあ……ナンかな?」

こちらは当たりだ。意外にも冷静さを保つ一同。だが、本当の恐怖はこれからだった……。

## 最終ラウンド ～完食～

鍋の中身を見て明らかに怖じ気づく挑戦者たち。しかし、作ったからには全て食べきるのが食材に対する礼儀というもの。さあ、意を決して完食へ!



「うわっ! キウイまずっ! すっぱ!」  
「どれどれ……うわっ! 本当まずい……」

苦しむ一同。そんなとき、意外な発見が。

「あのさー、餃子普通においしいんだけど」  
一同「!?!」  
「……いや、確かにいける。味が濃いのはセーフだ!」



だが完食を目指す一同の前に立ちふさがる壁は厚かった。

「おいしい! 大福なんて3個も入ってた!」  
「終わりが見えない……」

散々苦しみながらも最終的には完全に食べきった一同。その後の状態は……まさに死屍累々であった。

## 挑戦者談義

さて、すべてが終わったところで今日の闇鍋大会を振り返ってみることに。

「やっぱプリンはダメ! セツタイ」  
「あれはやばい。なんてたって溶け出すから……」  
「……もう言うな。思い出したくない」

「それにしても全体的に甘い具材ばっかだったな」  
「うん、確かに」  
「スイーツ流行の世相の反映とか?」  
「理由はなんにせよ、おかげで散々だよ……」

そうして、闇鍋に対する全員一致の見解が生まれた。



## 結論

- ・食べ物はやっぱおいしく食べるのが一番いい。
- ・正直もうやりたくない。

——最初から分かっていたような気がしないでもないが、これが今回闇鍋を実行して得られた結論である。次は絶対に普通の鍋をしようと心に誓う挑戦者たちだった。